

六花

り

っ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

5月号

花筏ちつちやなころから人面魚
齒にしみる六甲の水花の昼
滝音の中に水音花曇
糸引けば縫目ちぢみぬ花衣
花吹雪水飴練つてをりにけり
席取つて飯食ひにゆく桜かな
折れ枝に風の揺れゐる桜かな

ライターの風に消えたり花嘆き
枝々に揺り戻さるる桜かな
枝振りを誰も言はざる桜かな
木の股を溢れし雨や花万朶
車椅子車輪に花を付けゆけり
散桜流れしままの形なる
空明くなりて日暮や山桜
残花かな六甲茶屋の埃本



篝火草濃きくちづけの舌のごと
淑気かな雪の溶けたる水たまり
白梅の淑気咲かせてをりにけり
餅花やかつて花街なるところ
餅花の夜に静まりて沈まざる
餅花に色の集まる夜更かな
餅花のしなりの浅くなりにつり
姫始へとしめりゆく指輪かな
冬の水拔羽根舟のふるへをり
咆吼の末枯の野に放たるる

雪女悲鳴の如く現れつ

貝森 光大

グウばかり出るジャンケンや寒に入る
雪達磨記念写真のみ遺す

大将は泣かぬものなり雪合戦
雪合戦記憶の奥に投げ返す

常識としては雪女に人間が悲鳴を上げるのだが、その「悲鳴」という言葉を逆手にとって雪女の現れ方が「悲鳴のごとく」であると大胆な比喩で現した。

ごとく俳句はともすれば平凡で当たり前な例えになり失敗するのだが、ここまで裏切った例を知らない。寒さと恐怖が生み出す雪女の幻影も、このように言われるとユーモラスな雪女に思えてくるのは貝森さんの言葉のマジック。

座

禅

笹村政子

粉雪の光となりて消えにけり
座禅とも凍りつきたる男とも
白き息まるく吐きたる聖歌隊
境内に拾ふ小判や初戎
売れ残るだるまを寝かす残り福

鳥雲に

水谷ひさ江

春泥の付きたるままの祝餅
くちやくちやのお守り袋卒業す
女雛のみ売られてゐたる蚤の市
春泥の獣の匂ひしてゐたり
裏山の騒めきにけり鳥雲に

六花賞受賞作品

五十句

生まれて

ことり

桜 花 残 骸 の 上 に 降 る
春 灯 や さ さ い な 事 を 積 み 重 ね
春 の 水 零 る る 指 の 隙 間 よ り
春 雨 の 匂 ひ 女 身 に 満 ち に け り
落 椿 鳴 咽 の 花 粉 吐 き ぬ た る
わ た く し の 壊 れ る 音 か 花 の 雨
藤 の 花 山 の そ よ め き を り に け り
流 し 目 の や う な 筆 跡 花 の 雨
山 藤 に 風 の 重 た く 当 た り け り
春 惜 し む 風 化 途 中 の 石 を 手 に
住 所 録 左 手 で 繰 り 賀 状 書 く
崩 し た る 足 の 触 れ 合 ふ 雪 見 蕎 麦
風 花 は 天 の て の ひ ら よ り 零 る
氷 上 に 立 つ や 天 女 に 身 を 変 へ て
万 緑 や 泣 き な が ら 私 を 生 ん だ か
正 座 す る 国 に 生 ま れ て 沙 羅 の 花

子宮でも浮かんでゐたわ舟遊び
ちぎれたる翅あり夏は死の季節
梔子に取り囲まれる私の墓
これ以上待つくらゐなら蟬になる
森の蟬ここで生まれてここで死ぬ
蟬の死を拾ふ空蟬より軽し
あかんぼのおでこにこぼれかき氷
袂に手そはせて水を打つ夕べ
夕端居手に水晶をころがしつ
夜濯ぎの小さきものを干しにけり
絵扇の鳥の尾かすれをりにけり
風向きを芋に読めざる嵐かな
離したくなき手ありけり秋の暮
くちづけで分け合つてゐる秋思かな
障子貼る母と娘のひざ歩き
秋風の通りぬけゆく蛩籠
案山子の手吹き飛んでゆく野分かな

稲雀拍手のごとく飛び立てり
ひとひらの紅葉頭に亀浮き来
はなびらの影はなびらへ秋桜
澄む水の波紋途切れず流れけり
様々な声を覚えて年送る
埋火に黒き鉄瓶置かれたる
楮晒す切りつけてくる風の中
若松の匂ひ立ち込め年用意
寒卵生まれ変はるには遠し
雛の間を点さず待つてをりにけり
衣擦れの音の密かに沈丁花
垂れて藤揺れて藤なり絡み蔦
空蟬を手に転がして枝に戻す
青天に放り上げたる雪礫
寒月は叶はぬ恋に満ちにけり
木の実落つ人目を忍ぶ場にゆかば
粉雪が積もるよ珈琲飲むうちに

檜木集

年の内

宮森

毅

竿揺らすことなく発てり赤とんぼ
柏手の響き重なる秋深し
柏手の音入りきたる焚火かな
日めくりを見直してゐる冬至の日
窓拭きもあと一枚か年の内

積雪

佐原 正子

袖の丈詰めてをりゐる炬燵かな
雪照らす七千本の竹の燭
満載のダンプ行き交ふ雪捨て場
やせうまの程良い餡こ冬の夜
サイレンの雄叫びあげて出初式

同床異夢

松本文一郎

鉛筆を削り直して稿始
父と子の同床異夢や初笑
臘梅や防犯防災パトロール
賽の目の一を表に年越せり
丸餅のささやかな幸柳箸

六花集

山田六甲選

田尻 勝子

春雨や地蔵が赤き傘をさす
つるされし大蒜すべて芽吹きたる

立春のオパールの中燃えており

日出遅き日暮の早き峡の海

天二物与えているや春の友

わかやぎすずめ

出口 誠

粉雪の道を走るや子供らと

雪の夜ちらちらよぎる友の顔

雪積もり閉ざされてゆく心かな

冬の夜星の数だけ君を待つ

雪の音聴きつ眠りにつく夜かな

鯉幟ひこうき雲の貫ける

懐かしのテレビ主題歌子どもの日

いちばんの心配は我藤の花

若葉雨来るべきものとはいづれ来る

青葉山ひとつ歳とる我等ぬて

菜根譚

六甲

竿揺らすことなく発てり赤とんぼ 宮森 毅

「赤とんぼ止まっているよ棹の先」播州龍野市生まれの詩人三木露風が子供の頃に作った初めての俳句だという。つまり赤とんぼと竿は付きものと言おうか当たり前と言おうか、こんなもの俳句に詠むような材料ではないだろう！と芭蕉先生もお叱りになるところ。だが、作者はそんなこと百も承知で詠んだのである。一つ間違えばこれほど陳腐で平凡な句になるおそれを顧みず、その度胸の良さと言おうかアホさ加減というか、そのチャレンジ精神に敬服せざるを得ないのは竿を「揺らすことなく」飛び立ったと写生したところ。赤とんぼの身軽さや竿の先の細さ加減まで読者は鑑賞欲望をそえられる仕掛けになった。

やせうまの程良い餡こ冬の夜 佐原 正子

やせうまとは大分の名物菓子。私も二年前別府温泉で食べたことがある。幅広いきしめんのようなもので、

それに砂糖きな粉をまぶして食べる。きな粉だけでなく掲句のようにあんこをまぶして食べることがあるのかも。「やせうま」の由来が面白いのでインターネットから引用する。「昔、平安の都から、訳あつて身分のある方の幼君、鶴清丸を乳母の八瀬女がつれて落ち延びた。乳母は由布川村に住む、藤原の系統にあたる親戚を頼つて、幼君をかくまっていた。貧しくろくに食べるものも無い村であったが、鶴清丸はおやつ頃になると、いつも乳母の八瀬に「ウマ、ウマ。」といつてせがんだ。乳母は小麦粉を延ばしてきな粉をまぶし、おやつを作つて食べさせた。それが後世に伝わつて、幼君が「ウマ、ウマ」と八瀬にせがんだ事から乳母の名と合わせて「やせうま」と呼んだということである」と。ほどよいとは「程よい甘さ」のことであり昔は「甘い」すなわち美味しいことであつた。

塗箸でプリン食べ居る夜寒かな 岩松 八重

なんだかバツゲームのような実に困難を極めるたべ方。しかしそう考えるのは男の見方であるらしい。スプーンで食べると洗い物が増えると主婦は考えるのだそうだ。なるほど一理あり。(以下略)